

セルフライナーノーツ「no place」

## 1. 「カトレア」

この曲は確か、多摩川にいて、ジョンレノンのアルバム「imagine」を聴き終わった時に、出だしの「あの花の名前は何だろう、君は知ってる？僕はここに居ちゃいけないような気がしてる」という出だしが浮かんだ。風の気持ちよい日だった。

「僕は僕という欠落を抱いてる」というフレーズやテーマは、太宰治や芥川龍之介の小説を読みあさることから得たものだった。大学生活も終わり、就職していく友達の中、僕は一人取り残された気分だった。ある日、卒業後早々に会社を辞めてしまった友達から、芥川龍之介の「歯車」という短編を勧められた。僕はその小説の一行一行を、何度も読み返した。渋谷の街を歩き回って、その頃にはコーヒーの味も、苦々しく思った。何だかそれは、僕の吸ってる空気と、同じ味がする飲み物だった。

僕は事実、一人取り残されていた。僕の望んでいる僕が、今の僕じゃないとするなら、今の僕は、一体何なんだろう。何もできない、ただの役立たずだ。昼下がりに家でスパゲティーを一人で作っていると、こんな風な気持ちになった。出来上がった料理を一人で食べる。もっと悲惨な気持ちになってくる。それを何度も何度も繰り返した。

犬の散歩をしていると、家の角を曲がった所に、よく家の前でタバコを吸っている、おじさんがいる。おじさんは、七福神の恵比寿さんみたいな顔をしてタバコを吸ってる。きっと家の中で吸うと、家族に嫌がられるのだ。彼は、犬が大好きで、大体僕の犬を撫でに、路上に出てくる。そこで二、三やりとりをする。そのおじさんはよく僕に、若者はしっかり働けよ、いいか、と言ってくる。

そしていつからか、僕は家の角を曲がる前に、ちらっといつもおじさんの家を盗み見るようになって、おじさんが家の前でタバコを吸っていると、道を引き返して、違う道に行くようになる。それでも一週間に一度くらいは、必ず今も、おじさんと会話をする。

ある午後、どこかから、宅急便で届いた花を、母の机の上に活ける。しばらくそれを母のベッドに腰掛けて、眺めている。タバコでも吸ってみたいけど、僕はタバコが好きじゃない。

僕は、僕という欠落を抱いてる。でもそう歌うほど、違う気がする。

ぼんやりと意識は、薄れていく…。

僕はそこに、言葉を書いている。

## 2. 「no place」

アルバム表題曲。僕が高校生で17歳のとき、初めて作曲した4曲中の1曲。ということは、僕の作曲において、これが源泉といえるものだ。

自分が曲を書くということを、それまでの人生、考えてもいなかったから、作曲というものに対して、自分なりの姿勢も理想もなかった。初めての作曲は、学校の帰り道、ウォークマンで音楽を聴いていた時だった。坂を下ってるときに、聴いている音楽が間奏部分になって、歌がなくなった。僕は急にその演奏に合わせて、気分にならせて歌い始めて、坂を下りきる頃には歌詞とメロディーが出来ていた。そのまま忘れない様に歌い続けながら家まで帰って、カセットテープにそれを録音した。

ギターのコードや、演奏の仕組みがよく分からなかった僕は、次の日に、友達と本屋に行って、歌が生まれた時、聴いていた曲の楽譜を探して、間奏部分のコード進行を調べた。家に帰ると、友達がそれを弾いて僕が歌った。友達は、これは聴いたことないから、きっとお前の曲だ、って言った。そんな風にして、僕は曲を作り始めた。

高校2、3年生のときは特に、学校の教室に居場所がなかった。休み時間になると、話す人がいない。音楽を聴いて、机に突っ伏していたらきつと暗い、閉鎖的な人間だと言われるだろうし、（それに周りが気になって音楽に集中できるわけもない。）どうしたらいいか分からなくて、いつも遠い道のりを、技術室のある校舎まで歩いて行って、水を飲んだ。

技術室の校舎までの道のりは、いつも木漏れ日で揺れていた。今思えば、自分のせいでもあると思う。僕はその頃、自分自身とも、上手く付き合いきれなくなっていた。自分自身と会話することも嫌だったので、部活以外の時間は、僕は無口な被害妄想の固まりになり果てていた。学校の帰り道、一人になって聴く音楽は僕にとっていつも、自分からも、現実からも離れた、白い空間、何処にもない、居場所だった。

この曲は人生初のライブ、高校の文化祭で歌った。本番のセッティング中、僕のギターの音がトラブルで出なかった。（パニックになってる僕がエフェクターを、アンプからギターに、逆に繋いだのだ。）眼鏡をステージ裏に置いてきてしまって、原因がさっぱり分からなかった。それで僕は更にパニックになって、殆ど半泣きになった。

僕は確か、歌う前に「僕がこれから歌うのは、自分で作った曲で、オリジナルです。」って言った。でも何の反応もなかった。しーん。目の前にいる人の頭が、真っ黒に見えた。それで僕は言い直そうと、「いや、オリジナルっていうのは、曲名じゃなくて。…これから歌うのはno placeっていう曲で

居場所がないっていう意味。」って言ったら、聴きに来ていた学校中のみんながドッと笑ったのを覚えている。きっと緊張の極限にいた僕の出した声、その全てがおかしかったんだろうけど、何でみんながそんなに笑うのか、その時の僕には分からなかった。

### 3. 「眠れる森」

これは、夢遊病者のダンス。この曲は長い間不眠に悩まされていた当時、書き上げた記憶がある。ある夜に眠れず、することもなくベッドに座り込んでいたら、急にそいつはやってきた。

この曲の詩には、ある種特有の香りがあると思う。そしてこれから書く事は、この曲の制作自体には、直接関係ある話なのか、分からない。でも、その頃の僕にあった話だ。

禁煙のウイスキーバーが地元の駅からすぐ近くにあって、そこに通うことが好きになった。そこはマスター手作りの真空管のアンプにスピーカー。古いジャズがかかるところで、僕はそこでマックスローチのドラムにハマリ、ヘレンメリルの歌声に魅せられ、クリフォードブラウンのトランペットに心打たれた。店内は禁煙で、音楽の音量も丁度良く、照明も空調も何もかも居心地の良い空間だった。お客さんもみんな、そこを、みんなの「オアシス」だと思って足を運ぶ人たちがばかりだ。

店はマスターが一人でやっていた。マスターはテディベアをもっと可愛くしたような人で、僕に沢山の音楽を教えてくれて、沢山の美味しいウイスキーを飲ませてくれた。いつもカウンターの向こうでニコニコと、いかにもお人好しな人が見せる上品な笑いを浮かべていた。チェイサーの水も適度の冷たさで、すごくおいしかったのを覚えている。

僕はそこで「ラフロイグ」というウイスキーが好きだということを知った。喉を抜ける香りが最高だった。ラフロイグを飲みながら、恍惚の中でジャズを聴いた。それは自分の体の中に、密かな暖炉ができた感じだった。こんなセクシーで情熱的なものは、世界にこれしかないと思えた。

でもその店は、僕が知ってから丁度一年後くらいに、閉めることになった。不況の煽りだったのだと思う。マスターもしょうがないんですよ、と笑って言う。悔しさも悲しさも、その表情からは見えなかった。

最後の日、マスターは普段は高すぎて、絶対飲めないウイスキーを3杯、破格の値段で飲ませてくれた。それで僕は、「ポートエレン」というウイスキーに出会った。繊細でいて、しっかりした味わいだった。上質なものだけにある、奥行きがあった。そのウイスキーは、音楽そのものだった。僕も、いつかこういう、繊細でいて、深い感情のある音楽がやりたいと思った。

樽の香り。何年も熟成していく深み。ある一晚に降りた、ジャズ演奏家たちの奇跡。そう、何十年も前に、僕が生まれるずっと前に、この世界に起こっていた出来事、その演奏を、耳にする。その演奏にはまだ生きた魂が宿っていて、僕は彼らの息づかい、彼らの汗が、すぐそこにあるみたいに感じた。僕はあのカウンター6席くらいの小さなバーで、ジャズを聴きながら、色んなことを教えてもらった。またいつか、マスターはウイスキーバーを開くという。僕は気長にそれを待っている。

#### 4. 「just happy」

浮気をされて、傷ついている主人公。それを知るのも、認めるのも彼には辛い。主人公は彼女を送った後、頭痛がして駅で座り込んでしまう。

そして、気分任せて、死を考えてみたりする。彼は気づいている。彼女の心に、僕はもういない。何の価値もない。誰かを好きになって、傷つくなんて。何の価値もない。みんな、好きにやればいい。勝手に、好きにやればいい。僕はもう降りる。こんなつまらないこと、僕にはもう、何も関係ないことだ。

飛び降り自殺というテーマも、この曲の根底に流れている。

電車が駅のホームを通過するとき、全身に寒気を感じる。通過する瞬間にリズム良く、ひょいっと3歩先にジャンプするだけで僕は本当に、すぐにでも死んでしまえるんだ。そんなときは電車が通り過ぎるときの、あの、頬に当たる風が怖い。

地下鉄の駅に入ったときの、生暖かい風なんか、僕を誘っているようにしか思えない。

でも、あまりそんなこと気にしないで聴いてもらえたらと思っている。

#### 5. 「タンバリンマン」

「タンバリンマン」は僕が一年くらい、お酒を作る仕事をしていたときに生まれた。

そのバーは、店員もみんなミュージシャンだった。僕はそこで仲良くなったパーカッションをやっている先輩と、営業が終わると二人でよくステージ貸しきりのセッションをした。或る夜、二人でグラスを洗いながら、いつまでこういう生活をやってるんだろうね、僕たちも早く音楽だけでやっていきたいね、と話していた。

毎日がもう、繰り返し、繰り返して、僕たちはどこにも行けないみたいに思えた。そして、その日のセッションでこの曲が生まれた。

怖いのは ずっとこのまま  
何も変わらず 夢を見たまま  
少しずつ ゆっくりと 黒い幕が降りてること

僕たちは何かに向かっていた。終着点はきつと、あるはずだった。それは自分が望んでいるものにしろ、そうでないものにしろ…。怖いのは、今も、黒い幕が、降りていること。最後に死ぬのは、分かっている。でもそれまでを、どうやって過ごせるだろう。これが僕たちのその時の現実であり、向かい合うべき、それぞれの人生だった。

## 6. 「ラストダンス」

まず、「ラストタンゴインパリ」という映画がある。悲しい映画。でも酔っぱらいながら主人公が女を誘い、踊る姿は最高だ。そして、「セントオブウーマン」。これも盲人役のアルパチーノが素敵なダンスを踊る。この二つの映画の主人公は、心に虚ろな兵士や、汚れた羊を抱えている。でもある日、彼らは女性をエスコートし、ダンスする。

僕は映画の中で男と女、二人が寄り添ってひと時の間、踊るのを見るのがたまらなく好きだ。もし男の心がずぶ濡れでも、女性が、彼の目にその晩、この上なく美しいなら、今まで起きたことの何もかもは素晴らしい。映画って、そんな感じだから好きだ。

そして古い曲で、「ラストダンスは君と」という曲がある。それで僕はラストダンスというものは、大切な人と踊るものだとすることを教わった。

この曲を歌い終えた後にディレクターの丸山さんに、「面白いね。ホールドオンミー、たった一度だけでいい、僕にそう言ってほしい、って歌ってるのに、このアキラ君の声は、初めから何か諦めてるよね。」と言われ、本当にそうだなと思った。

こういうストレートなラブソングを情熱的じゃなく、少し諦めて歌うのは、僕のやりたいことの一つだった。（でも次のアルバムこそは、ストレートなものを、ストレートにやってやる。もう逃げない。）ほら、よく外国の映画やドラマとかで見る、学生のダンスパーティーで一生懸命踊ってるけど、誰からも相手してもらえない男の子…。僕はその子が書きたかった。何を隠そう。その哀しきツイスト青年こそ、まさに僕だからだ。はっはっはっはっ…。

## 7. 「アニマ」

ユングの心理学用語から借りてきて、作った曲。アニマとは、男性の夢の中にある無意識、女性的な精神部分のことをいう。（夢の話も面白いけど、「人間の中にある意識と無意識」、については未だに考え続けている。とても面白い主題だと思う。）

個人的には、「沈んでく船の 船長さん バイバイ」という歌詞が好き。

いつも歌ってるとき、船長さんに、ここでバイバイする。

思えば、フランスに行ったことと、日本の神社に行くようになったことが、この曲を作ったことに一番関係があるような気がする。印象派の風景、からなるサビのヴァースは、パリに行った時、美術館の帰りに、凱旋門の方へ、意気揚々と歩きながらロザンで作った…。

大学生になって、絵を美術館によく見に行くようになった習慣も、段々と曲に反映されるようになってきた。学校で美術の成績は最悪だったけど、「鑑賞するのは好きなんだ」ということに気づいた。ゴッホが来たときには、何度も足を運んだ。「残照の中の老人」というものと「病める子供」というような題名の絵が、僕の心から二度と離れなくなった。

（「残照の中の老人」はゴッホが自分の父の姿を描いていると、説明に書いてあった。それで僕は、その老人を眺めている人の気持ちはどうしてか、分かるように思えた。）

老人は光り輝く麦畑のような、草原のような場所にいた。老人を眺めている者の心の奥に、父も、気づいたらあんなに年老いてしまったのだ、という想いがよぎった。風は穏やかで、そして光は何もかもを、戻りたいものへと変えていった。…自分の父をこうやって見ているのも、もうそんなに長くはないかもしれない。

また、病床の子供は、薄暗い、青緑色の闇に浸された部屋で、その目からは、死を放っていた。部屋の壁は、彼の背中に常に、迫っていた。それはどうすることもできない、病だった。小さな子供はもうすでに、一人きりで、最後の駅にいたのだ。この二枚の絵は僕の中に対比する、二つのイメージになっていった…。

金色の草原と、薄暗い部屋。その二つのイメージにおいて、人生に、栄光というものはなかった。人生はただただ、長く暗いトンネルだった。あるのは、不安で未熟な幼少期の怯えと、後からくる、取り戻しようのない老いだけだった。

ゴッホの絵に、革靴の絵がある。画家の叔父さんが（彼は僕の歌は、画家でいえばゴッホやクレードって誉めてくれる！）、その絵には、貧しさ、若さ、激しさ、失望、絶望、色んなものが描かれている、彼の絵はとても感情的だ、と言っていた。人間の感情、そのものだと。だから何度見ても、僕た

ちの色々な感情に訴えるのだと。

## 8. 「pulse」

家の風呂場の電球が切れて、それ以来、ずっと電球を替えていなかったことがあった。電気のカバーに付いているネジが湿気で錆びてしまって、どんなドライバーを使っても取り出せなかったからだ。（そんな時は「クレ55」ということ、僕の家族は誰一人知らなかった。）

家族のみんなは洗面所の電気を使って、薄暗いお風呂に入っていたけど、僕はいつも明かりが何処からも漏れないように真っ暗にして、お風呂に入った。そんなお風呂の時間は、自分の存在が消えてしまうようでもあるし、また、意識が体から離れて、研ぎ澄まされているような気持ちにもなる、不思議なチャンスだった。

そんなお風呂は、「自棄」の感覚から始まる。自分の存在が何か、違うものになってしまうみたいに。バスタブの中でうずくまって、脈拍を数えている。その時、脈拍以外に、自分には何も残っていない。孤立していく、全てから。静かに、永遠に。幽体離脱…。

生きることと、死ぬことばかり、考えている。

「僕」は身体だけの存在であり、心だけの存在なんだ。両方は、一緒にならない。常に変化していて、いつも別々のところにいる。

この曲は、バスタブの中のようにでもあり、母親の胎内のようでもあり、深い海の底のようでもあり、暗く果てしない宇宙のようでもある。バスタブの中が、実は那由多に広がる大きな宇宙へと繋がっているという、そんなイメージを表現したくて作った。無音の中、宇宙の中を静かに進むイメージ。（手塚治虫や、スタンリーキューブリックが描いた世界にあるような。）

アルバム中、もっとも演奏パートが長い曲。ようこそ。2009年宇宙の旅へ。飲酒している方、想像力が何かと豊かな方、家の電気が止められている方は、よりお楽しみいただけると思います。それでは、いつてらっしゃい。

## 9. 「screen」

もしあなたが、昔愛した人のことを、8ミリカメラで撮った映像で、暖炉の傍、革のソファに座って一人、静かに見ている中年の男性だったら…。映画「ニューシネマパラダイス」を見て、いつからか、そんなイメージが僕にあった。

screen という単語には、映し出すスクリーンの他に、何かと何かを「遮る」という意味合いもある。(例えば日焼け止めは、サンスクリーン。)

screen. 僕とあなたを遮るもの。それは二人の弱さ。過ぎ去ってしまった、時間。戻ることのない情熱。乾ききった会話。・・・叶わなかった恋の物語。

## 10. 「月を食べた日」

僕が20歳になった年、父の命日の夜明け頃に作った曲。

朝起きると、夜明けに、朦朧としていた意識の中で、自分が泣きながらノートに曲を書きながらいる記憶があった。

それが夢なのか、現実なのか、分からなかった。ノートを開いてみると、この曲が書かれていた。コードと歌詞が凄まじい勢いで書きなぐられていた。

歌いだした途端に、曲の全てが僕の中になだれ込んできた。

それで、久しぶりに父をすぐ近くを感じた。お墓に行っても、ずっと会えなかった。この曲が生まれてきて、本当に嬉しかったことを覚えている。

まだ僕たちが大学に入りたての頃、僕の高校時代の友達が、渋谷でピンクフロイドの映画「ザ・ウォール」がレイトショーでやってるから、一緒に見に行こうよ、と言ってきた。それで僕は夜の10時頃、映画館の前で彼を待っていた。彼は何分か遅れてやってきた。上映開始、ギリギリの到着だった。しかもその登場の仕方が最悪で、彼はその前の飲み会のせいでかなり酔っぱらってるらしく、まともに歩けない状態で、西武からロフトの方に上がっていく、石畳の緩やかな坂道を四つん這いになって、蜘蛛みたくに這い上がってきたのだ。カフカの「変身」だった。それはちょっと見たことない、目を疑うほどの酔いぶりだった。それでも僕はその頃、まだあまり飲酒をしたことがない、無駄にナイーブな阿呆だったから、そのまま彼を家に連れて帰らずに、約束通り、彼を連れて映画館に入った。

映画が始まった途端、彼は謎の大笑いをして、ちょっとトイレに行ってくると言って、館内から颯爽と出て行ってしまった。随分帰ってこないの、心配になってトイレに行くと、一番奥の個室に、鍵がかかっている。ドアを叩いて話しかけると、まあ、まともに返事が返ってくる。ごめん、ごめん。ちょっとね、休んでるんだ、いいから映画を見ていてよ。僕は売店で水を買って、その個室に放り込んで、また映画に戻っていった。映画のある場面で、カラスが飛行機になって、爆弾を落とすアニメーションがあった。それが僕の目に焼き付いた。



彼はとうとう、席に戻ってこず、その日、僕たちは映画館の人たちに追い出されるまで、そこにいた。帰りは、ゆっくり僕の家まで歩いて帰った。

家に帰ると、夜勤明けの父が起きていた。僕たちはそれで、その夜のことで二言三言冗談を言い合った。

その時は別に大したことない一日だった。明日になったらこれをネタに、学校の友達に、昼ご飯の時にでも話してやろうというくらいにしか、思っただけだったと思う。でも、時間が経つと、あの日は、僕にとって胸に残る、一日に変わっていった。

僕らはあの時18歳で、何も変わらない毎日が、ずっと続くと思ってた。友達はまだ酒を飲むことに対して無茶苦茶で、二人は背伸びをして、ロックの伝説的映画のレイトショーを見に行った。今もよく、僕の家で二人は遊ぶけど、あんな風にはもう一生ならない。…というか、ならなくていい。でも、一緒にあんな風になったことのある友達というのは、人生でみても、きっと案外少ないなあと思う。

最後に、「何も怖くはないんだよ」と繰り返し歌って終わるアルバムになって良かった。この言葉に僕自身、ある時期を通してどれだけ励まされたか分からない。

2009年 10月 オガワアキラ